様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007 年度 ～ 2009 年度
課題番号：１９５２０３４９
研究課題名（和文）　日本語と朝鮮語における文法化現象の総合的研究
—対照言語学からのアプローチ—
研究課題名（英文）　A Comprehensive Study of Grammaticalization in Japanese and Korean: A Contrastive Linguistic Approach

研究代表者
塚本　秀樹　（TSUKAMOTO　Hideki）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：６０２０７３４７

研究成果の概要（和文）：日本語と朝鮮語における諸言語現象について詳細に考察すると，日本語では文法化が生じているものが比較的多いのに対して，朝鮮語では文法化が生じているものが比較的少なく，両言語間で文法化の進度の違いがあることを見出すことができるが，こういったことは，本研究課題で考察した複合動詞構文，形容詞述語構文，形式語を含む名詞述語構文などでも例証でき，また動詞・形容詞・名詞といった品詞の違いにかかわらず該当する。

研究成果の概要（英文）：Detailed examination of various linguistic phenomena in Japanese and Korean shows that they are more frequently grammaticalized in Japanese than in Korean; this finding can also be exemplified by compound verb construction, adjective predicate construction, nominal predicate construction including a formal noun, etc. The finding holds true of all three kinds of predicate construction irrespective of difference in word class, such as verb, adjective, and noun.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：日本語，朝鮮語／韓国語，文法化，対照言語学，言語類型論，動詞，形容詞，名詞

１．研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の塚本は，これまでの一連の研究で次のことを明らかにした。

① 日本語と朝鮮語における諸言語現象について考察すると，日本語では文法化が生じているものが比較的多いのに対して，朝鮮語では文法化が生じているものが比較的少なく，両言語間で文法化の進度の違いがあること

を見出すことができる。
② 両言語間におけるこういった文法化の進度の違いは，次に示す，形態・統語的仕組みの違いというさらに根本的な要因と強く結び付いており，これに由来したものである。
③ 朝鮮語は，語なら語，節・文なら節・文といったように語と節・文の地位を明確に区別する仕組みになっているのに対して，日本語には，語と節・文が重なり合わさって融合している性質のものが存在する。

(2) 研究分担者の堀江は，研究代表者の塚本による研究（塚本 1995, 1997）に触発され，日本語と朝鮮語における形式と意味の相関関係について比較類型論 (comparative typology) 及び認知言語学 (cognitive linguistics) の観点から考察を行った（堀江 2001 など）。その結果，特に次のことを明らかにした。
① 日本語では，一つの形式に複数の意味を対応させる傾向が強いのに対して，朝鮮語では，一つの形式に一つの意味を対応させる傾向が強い。

(3) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江は，これまで学会などで会った時には各自の研究内容について意見交換・議論をしてきたが，上記の研究は基本的にはそれぞれ別個に行われたものである。また，文法化については，これまで研究代表者の塚本が動詞表現に，研究分担者の堀江が名詞表現にそれぞれ重点を置きながら，それぞれ異なる構文や現象を考察対象としてきた。

(4) 上述した経過があるため，研究代表者の塚本と研究分担者の堀江それぞれによるこれまでの研究を土台にし，研究代表者の塚本と研究分担者の堀江が常時，連携をとって相補う形で共同研究を行えば，非常に効果的な研究に結び付き，多大な研究成果を挙げることができると期待される。

２．研究の目的

(1) 日本語と朝鮮語における文法化現象には，具体的にどういうものがあるのか，ということを明らかにし，それを整理して記述する。

(2) それらの文法化現象に関する日本語と朝鮮語の間の類似点と相違点を，対照言語学からのアプローチで明らかにする。

(3) これによって指摘された両言語間の相違は何を意味し，何が要因となって生じているのか，ということについて対照言語学からのアプローチで探究する。

(4) これによって得られた研究成果が，さらに次の段階として本研究課題とは別に言語類型論からのアプローチで行う予定にしている研究とどのように関係づけられるのか，ということについて考察する。

３．研究の方法

(1) 入手した言語学関係の図書・論文によって，従来，行われてきた理論的なアプローチからの考察を検討し，入手した日本語と朝鮮語に関する参考書によって，まずは記述されている範囲内でそれぞれの言語の事実を確認する。

(2) 実際に使われている日本語と朝鮮語の例を新聞・雑誌・小説などから収集し，言語事実を明らかにする。

(3) 研究代表者及び研究分担者の直感が効かない朝鮮語に関しては，それぞれの所属研究機関で入念なインフォーマント調査を行い，従来の参考書には記述されていなかったり記述が詳しくなかったりする言語事実を明らかにする。

(4) 上記 (1) (2) (3) によって得られたデータと情報については，研究代表者と研究分担者の間でその都度，連絡をとって提供し合う。

(5) 上記 (1) (2) (3) で得られたデータと情報について検討するとともに，思索中の研究代表者及び研究分担者自身の考えについて意見交換を行う。

(6) 思索中の研究代表者及び研究分担者自身の考えについて他の多くの研究者と議論し，また助言を仰ぐ。

４．研究成果

(1) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江は，共同して，これまでの両者それぞれの研究成果を踏まえた上で，日本語と朝鮮語における文法化に関する対照言語学的な研究の現状を検討して考察するとともに，その課題を提起した。

(2) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における品詞について対照言語学からのアプローチで考察し，次のことを明らかにした。日本語では動作・行為の叙述に名詞述語を用いることができるのに対して，朝鮮語ではそれと同じことを行うのは困難であり，動詞述語を用いなければならない。また，日本語では名詞についての状態・性質を叙述するのに状態・性質を表す形容詞（あるいは形容動詞）

によって修飾された名詞を述語として用いることができるのに対して，朝鮮語ではそういったことが成り立たず，状態・性質を表す形容詞を述語とした表現形式をとる必要がある。こういった両言語間の相違は，研究代表者の塚本によるこれまでの研究で明らかにされた「形態・統語的仕組み」に関する両言語間の根本的な相違に起因している。さらに，一般的に動作・行為を表す名詞が入り，具体的なものを表す名詞が入り得ない補語の中に具体的なものを表す名詞を置くことによって動作・行為性を引き出し，表現を成立させる，といったことが，日本語では比較的容易に行われるのに対して，朝鮮語では日本語におけるよりも困難である。

(3) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における品詞について対照言語学からのアプローチで考察し，次のことを明らかにした。日本語では，漢語及び西洋語に付加される要素が動詞の場合と形容動詞の場合とでは形態的に異なる。ところが一方，朝鮮語では，動詞の場合でも形容詞の場合でも形態的に同一の要素が付加される。従って，日本語における形容動詞は動詞よりもむしろ名詞に寄っているのに対して，朝鮮語における形容詞は動詞に寄っており，それぞれの品詞体系における位置づけが両言語間で異なっている。また，日本語の形容動詞では文法化が生じているのに対して，朝鮮語の形容詞ではそういったことが生じていない，という相違が指摘できるが，これは，両言語における他の諸言語現象で見出せる文法化の状況と平行的である。

(4) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における複合動詞について対照言語学からのアプローチで考察し，次のことを明らかにした。両言語における複合動詞については，次の相違点を指摘することができる。(A) 日本語で統語的複合動詞を用いて表現することができる場合に，朝鮮語では複合動詞として成立することが認められないこと，(B) 日本語では後項が様態を表す複合動詞を数多く見出すことができるのに対して，朝鮮語ではそういった複合動詞はなくはないが，非常に限られているということ，(C) 朝鮮語における統語的複合動詞が，日本語においては複合動詞ではなく，「動詞連用形＋接続語尾『て』＋動詞」という形式に対応して表現されるということ，(D) 両言語ともに複合動詞としては成立するが，前項と後項が両言語でちょうど逆の順序になっている複合動詞が存在するということ，などである。こういった両言語間の相違については，研究代表者の塚本によるこれまでの研究で明らかにされた「形態・統語的仕組み」に関する両言語間の根本的な相違に基づくことにより，適切な記述・説明が可能となる。

(5) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における語彙的複合動詞について対照言語学からのアプローチで考察し，次のことを明らかにした。日本語の語彙的複合動詞における前項動詞と後項動詞の組み合わせについては，項構造のように統語論レベルに依拠するだけでは適切な記述・説明を与えることができず，そうするためには，どうしても意味構造のように意味論レベルにまで踏み込まなければならない。それに対して，朝鮮語における同じ対象について記述・説明するに当たっては，統語論の範囲内で処理することが可能であり，意味論にまで言及する必要がない。

(6) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における名詞述語節について対照言語学からのアプローチで考察し，次のことを明らかにした。両言語ともに，「～予定だ／～예정이다<yeyceng-ita>」や「～計画だ／～계획이다<kyeyhoyk-ita>」のように，一般名詞を含んだ名詞述語節を見出すことができるが，日本語では，「～のだ」「～はずだ」「～ものだ」「～ことだ」「～ようだ」「～べきだ」「～みたいだ」「～ところだ」のように，形式名詞を含んだ名詞述語節の数と種類が比較的多いのに対して，朝鮮語では，そういったものが「～ 것이다 <kes-ita>（～のだ，～ものだ；～つもりだ，～だろう）」や「～터이다 <the-ita>（～つもりだ，～はずだ）」のようになくはないものの，日本語に比べると少ない，という両言語間の相違が指摘できる。この事実から，日本語では名詞述語節において文法化が一層，生じているのに対して，朝鮮語ではそういったことがさほど生じていない，ということが導き出せ，またこれは，両言語における他の諸言語現象で見出せる文法化の状況と平行的である。

(7) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における文法化と形態・統語的仕組みの関係について次のことを明らかにした。文法化については，日本語では文法化が生じている言語現象が比較的多いのに対して，朝鮮語ではそういった言語現象が比較的少ない，という両言語間の相違を導き出すことができ，形態・統語的仕組みについては，日本語には語と節・文が重なり合わさって融合している性質のものが存在するのに対して，朝鮮語では語なら語，節・文なら節・文といったように語と節・文の地位を明確に区別する仕組みになっている，という両言語間の相違を導き出すことができるが，前者の文法化に関する両言語間の相違は，後者の形態・統語的仕組みに関する両言語間の相違というさらに根本的

な要因と強く結び付いており，これに由来したものである。

(8) 研究代表者の塚本は，これまで20数年間，行ってきた研究で得られた成果を著書にまとめる作業をしたが，これらの研究成果の一部として，上記 (1) ～ (7) も含まれている。

(9) 研究分担者の堀江は，異なる語用論的・意味論的現象に関して，日本語と朝鮮語，日本語と中国語という二種類の対照分析を行った。その結果，日本語と朝鮮語の場合には，間主観化の方向への語用論的・意味論的変化に関して，日本語の方が朝鮮語よりも拡張が著しい，といういわばミクロレベルの興味深い相違が見られた。一方，日本語と中国語の場合には，「行為拘束的モダリティ」が「認識的モダリティ」よりも，より原型的であるという，日本語と朝鮮語の場合よりも根本的な，いわばマクロレベルにおける意味的・語用論的相違が観察された。

(10) 研究分担者の堀江は，パラレルコーパスの分析に基づいて日本語と朝鮮語における受動文の間に，機能ごとにどのような使用頻度や分布の相違が見られるかを対比分析した。その結果，1 人称（話し手，書き手）が動作の受け手となっている場合に受動文が用いられる傾向は日本語において朝鮮語よりもはるかに顕著に見られた。このことは，やりもらい構文や「～てくる」に相当する構文の使用に関する両言語間の違いとも相関している。さらに，これらの対比を認知・機能主義的観点から見た場合，日本語の方が朝鮮語よりもより「主観性」が高いことを示唆している，ということも論じた。

(11) 研究分担者の堀江は，他動性を表示する形式においてどのような文法化現象が表象するか，という点に関して，日本語・朝鮮語という膠着型言語と，中国語・ベトナム語という孤立型言語の全体的な対比と，それぞれの形態類型論的グループ内部の二言語間のより微妙な相違点に関する分析を行った。その結果，両形態論的グループ間には，他動性表示形式の文法化における形態・統語的，意味的な融合の度合いに関して顕著な相違が見られた。すなわち，前者（日本語と朝鮮語）は後者（中国語とベトナム語）よりも融合度合いが進んでいることが分かった。また，それぞれのグループの二言語間の対比を行ったところ，日本語は朝鮮語よりも他動性表示形式の「逆接」の意味への拡張に関して進んでいることが分かった。さらに，中国語はベトナム語よりも他動性をより明示的に表示する形式として文法化されていることが確認された。

(12) 研究分担者の堀江は，Traugott 教授の提唱した「主観化」及び「間主観化」という概念を定義し，これらの概念が言語間の対照言語学的研究にどのように応用できるかを，「のだ」と「것이다<kes-ita>」という共通点の多い文法形式の意味・機能の対比的分析を通じて示した。その結果，日本語の「のだ」の方が，朝鮮語の「것이다<kes-ita>」よりも「間主観的」意味への拡張の度合いが高いことが確認された。

(13) 研究分担者の堀江は，日本語と朝鮮語における形式名詞である「の」と「것<kes>」の文法化を類型論的な観点から対比した。その結果，補文，分裂文，主要部内在型関係節，副詞節，文末形式のいずれに関しても日本語の「の」が朝鮮語の「것<kes>」よりも文法化の度合いが進んでいることが確認された。そして，これは文法の他領域における文法化に見られる両言語の対比とも平行的であることが明らかになった。

(14) 研究分担者の堀江は，日本語と朝鮮語におけるモダリティ体系が共通して持っている意味的・語用論的特徴，すなわち，行為拘束的モダリティから認識的モダリティというヨーロッパ言語などにおいて顕著な意味変化の方向性の欠如という共通の特徴を出発点とし，両言語が「総合的モダリティ形式」から「分析的モダリティ形式」という通時的変化の方向性を共有していることを示した。また，その中にも両言語間に微妙な相違点があること（例：朝鮮語に「겠<keyss>」のような総合的形式が残存していること）を指摘した。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１６件）

① 塚本秀樹，2009，「日本語と朝鮮語における複合動詞再考―対照言語学からのアプローチ―」，『朝鮮半島のことばと社会　油谷幸利教授還暦記念論文集』，pp. 313-341，明石書店，査読なし

② 塚本秀樹，2009，「日本語と朝鮮語における品詞と言語現象のかかわり―対照言語学からのアプローチ―」，『語彙の意味と文法』，pp. 395-414，くろしお出版，査読あり

③ Kim, Joung-Min and Kaoru Horie. 2009. Intersubjectification and Textual Functions of Japanese *Noda* and Korean *Kes-ita*. *Japanese/Korean Linguistics*, 16, pp. 279-288. Stanford: CSLI Publications. 査読あり

④ Wang, Luming, Kaoru Horie, and Prashant Pardeshi. 2009. Toward a Functional Typology of Noun Modifying Constructions in Japanese andChinese: A Corpus-Based Account. *Studies in Language Sciences*, 8, pp. 213-228. Tokyo: Kurosio Publishers. 査読あり

⑤ Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2009. What is and What is not Language-Specific about the Japanese Modal System?: A Comparative and Historical Perspective. *Japanese Modality: Exploring Its Scope and Interpretations*. pp. 87-114. Pelgrave Macmillan. 査読あり

⑥ 堀江薫，2009,「認知類型論のアプローチ―構文機能の言語間変異―」,『言語』第 38 巻第 10 号，pp. 16-22，査読なし

⑦ 塚本秀樹，2008,「日本語と朝鮮語における品詞と言語現象のかかわり―対照言語学からのアプローチ―」,『アジア・アフリカの言語と言語学 3　特集：品詞分類の多様性』, pp. 29-46, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，査読あり

⑧ 堀江薫・塚本秀樹，2008,「日本語と朝鮮語における文法化の対照研究の現状と課題」,『日本語と朝鮮語の対照研究Ⅱ　東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば―進化認知科学的展開」研究報告書』, pp. 3-18，東京大学大学院総合文化研究科，査読なし

⑨ Horie, Kaoru. 2008. Grammaticalization of Nominalizers in Japanese and Its Theoretical Implications: A Contrastive Study with Korean. *Rethinking Grammaticalization: New Perspectives*. pp. 169-187. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. 査読あり

⑩ 堀江薫，2008,「間主観化―文法の語用論的基盤のタイポロジーに向けて―」,『言語』第 37 巻第 5 号，pp. 36-41，査読なし

⑪ 堀江薫・金廷珉，2008,「『主観化・間主観化』の観点から見た日本語・韓国語の文法現象―Elizabeth C. Traugott 教授の文法化研究の新展開―」,『言語』第 37 巻第 2 号，pp. 84-89，査読なし

⑫ Horie, Kaoru. 2007. Subjectification and Intersubjectification in Japanese: A Comparative-Typological Perspective. *Journal of Historical Pragmatics* 8.2, pp. 311-323. 査読あり

⑬ 堀江 薫・村上雄太郎，2007,「膠着型言語と孤立型言語における他動性表示形式の文法化―日韓・中越語の対比を通じて―」,『他動性の通言語的研究』, pp. 217-229, 査読あり

⑭ Horie, Kaoru, Joungmin Kim, and Mizuho Tamaji. 2007. Where Japanese Contrasts with Korean and Mandarin Chinese: Intersubjectivity, Modality, and the Differential Pragmatic-Semantic Foundations across Languages. *Studies in Pragmatics*, 9, pp. 1-16. 査読あり

⑮ Pardeshi, Prashant, L. Qinmei, and Kaoru Horie. 2007. Where, How and Why Do Passives in Japanese and Korean Differ?: A Parallel Corpus Account. *Japanese/Korean Linguistics*, 15, pp. 311-323. Stanford: CSLI Publications. 査読あり

⑯ Ishihara, Tsuneyoshi, Kaoru Horie, and Prashant Pardeshi. 2007. What Does the Korean “Double Causative” Reveal about Causation and Korean?: A Corpus-Based Contrastive Study with Japanese. *Japanese/Korean Linguistics*, 14, pp. 321-330. Stanford: CSLI Publications. 査読あり

〔学会発表〕（計１０件）

① 塚本秀樹,「日本語と朝鮮語における動詞・形容詞述語節と名詞述語節―対照言語学からのアプローチ―」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「節連結に関する通言語的研究」2010 年度第 1 回研究会，2010 年 5 月 23 日，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

② 塚本秀樹,「朝鮮語との対照で日本語について見えてくるもの―日本語は本当に特異な言語ではないのか？―」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所重点共同研究プロジェクト「言語の構造的多様性と言語理論―『語』の内部構造と統語機能を中心に」2009 年度第 2 回研究会, 2010 年 3 月 7 日，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

③ 堀江薫,「文末形式と定形性：認知類型論と語用論の観点から」,「場」の言語学 Colloquium，2010 年 1 月 22 日，早稲田大学

④ 塚本秀樹,「ワークショップ『日韓語の文末形式の対照研究の新展開：構文論的・語用論的機能の対比を中心に』における指定討論者」, 日本言語学会第 138 回大会, 2009 年 6 月 20 日，神田外語大学

⑤ Horie, Kaoru. The Interactional Origin of Noun-Oriented Predicate Structure in Japanese: A Comparative Perspective. The 11th International Pragmatics Conference. July 16, 2009. Melbourne, Australia.

⑥ 和田由里恵・堀江薫,「日本語学習者のポライトネス・ストラテジー―学習者の母語と滞在期間の影響」, 言語科学会第 12 回年次国際大会，2009 年 7 月 4 日，東京電機大学鳩山キャンパス

⑦ 堀江薫,「ワークショップ『日韓語の文末形式の対照研究の新展開：構文論的・語用

論的機能の対比を中心に』における企画・司会」，日本言語学会第 138 回大会，2009 年 6 月 20 日，神田外語大学

⑧ 金廷珉・堀江薫,「韓国人日本語学習者への『のだ』の指導に関する対照言語学的考察―韓国語の *KES-ITA* の談話機能との対比を通じて―」，The 6th International Conference on Practical Linguistics of Japanese，2008 年 3 月 2 日，米国サンフランシスコ州立大学

⑨ 塚本秀樹,「日本語と朝鮮語における品詞と言語現象のかかわり―対照言語学からのアプローチ―」，東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所重点共同研究プロジェクト「言語の構造的多様性と言語理論―『語』の内部構造と統語機能を中心に」2007 年度第 2 回研究会，2007 年 12 月 22 日，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

⑩ 金廷珉・堀江薫,「日本語の『のだ』の証拠性とポライトネス標示機能：韓国語の *kes-ita* との対比を通じて」，日本言語学会第 134 回大会，2007 年 6 月 18 日，麗澤大学

〔図書〕（計 1 件）

① 堀江薫, プラシャント・パルデシ，2009,『講座認知言語学のフロンティア　第 5 巻　言語のタイポロジー―認知類型論のアプローチ―』，pp. 281，研究社

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
　該当なし

６．研究組織

(1) 研究代表者
塚本　秀樹　（TSUKAMOTO　Hideki）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：６０２０７３４７

(2) 研究分担者
堀江　薫　（HORIE　Kaoru）
東北大学・高等教育開発推進センター・教授
研究者番号：７０１８１５２６

(3) 連携研究者
該当なし